げんでんふれあい福井

2009 SPRING　第33号

第10回 げんでんふるさと文化賞
および 芸術新人賞 受賞者インタビュー

戦国大名「朝倉氏の歴史と文化（三）」

ふるさと福井人物シリーズ「橋本左内（下）」

財団法人げんでんふれあい福井財団は福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的にしています。本誌はこの主旨に従い県民のみなさんとの絆を大切にした広報誌を目指します。

財団シンボルマーク

CONTENTS —— 33

●第10回げんでんふるさと文化賞および芸術新人賞受賞者インタビュー …… 2
●戦国大名「朝倉氏の歴史と文化(三)」 …… 4
●ふるさと福井・人物シリーズ「橋本左内（下）」 …… 6
●第11回ふるさと大賞写真コンテスト入賞作品 …… 8
●ふくいの伝統行事シリーズ「柴の実入れ」 …… 10
●敦賀市立博物館誌上ギャラリー／27 美人詠花之図　一幅 …… 11
●福井の文学碑「国語学者　橋本進吉」 …… 12
●第11回能を楽しむ会 …… 13
●第2回ふくいふるさとの祭り 開催 …… 13
●情報ファイル …… 14

FRONT COVER

国選択無形民俗文化財「国山の神事」〈福井市〉

福井市国山町に約四百年前から受け継がれている「国山の神事」が、一月三日夜、同地に鎮座の八王子神社で厳粛に営まれました。「ナルワイ」、「タガヤシ」と言われ、農作物の豊作を祈る年頭の予祝行事で四年毎に行われています。

天井にシバの枝がぎっしりと吊された神社拝殿でお祓いの後、東西の太夫による「ショウ（所）の言い立て」など約四時間で二十以上の演目を奉納しました。

終盤に、田主が初めて登場し、早乙女姿の子供達が太鼓の周りを廻り、棒振り役（田の代をならす）も加わり社人衆の謡に合わせて舞いを披露しました。

（詳細は本誌第八号参照）

第10回（平成20年度）げんでん ふるさと文化賞 山﨑さん（書道）・岡崎さん（文学）・永田さん（邦楽）

芸術新人賞 飯田さん（声楽）・雀野さん（文学）

財団では、二月七日（福井県のふるさとの日）に第十回げんでんふるさと文化賞ならびに芸術新人賞、およびふるさと大賞の表彰式を日本原電敦賀地区本部会議室（敦賀市本町二丁目）で行いました。

河島理事長から受賞者一人ひとりに賞状、賞金、顕彰楯を贈り栄誉をたたえました。

今回受賞された五名の方々に受賞の感想や地域文化活動の取組み等についてお聞きしました。

第10回げんでんふるさと文化賞・げんでん芸術新人賞およびふるさと大賞写真コンテスト入賞者の表彰式（於　日本原電敦賀地区本部）

受賞者インタビュー

座右の銘"きのうの私は今日の僕ではない!!"

山﨑灘菁さん〈大野市〉

山﨑さんに、今回の受賞の感想をお聞きしました。「受賞の報に信じ難い思いで我耳を疑いました。子供頃に祖父に習を褒められた一言がその後習の道を歩むことになり支えになりました。日常、座右の銘として"きのうの私は今日の僕ではない"と思いつつ作品の制作に打ち込んできました。ただ単に盲目的に先人の跡を追うことなく常に感性豊かな作品づくりを目指してきました。

殷時代の漢字、即ち「甲骨文」を中心に励んできましたが、書体の変遷に目を向けながらこの道に携わって半世紀の道程りの集大成となるものを試みたい」と抱負を語り、また、平家踊保存会長として「平家踊りは、歴史があり寂しいが優雅な世界を醸し出す踊りです。今後も継続していくんだという心構え、自信と誇りをもって保存に努めるよう常に会員に強調しています。」と元気に明るく話され伝統文化財の保存継承に取組んでいるなみなみならない熱意が伝わってきました。

福井の風土によって感性と想像力が培われた

岡崎　純さん〈敦賀市〉

「岡崎純詩集」をはじめ多くの詩集を出版され、心あふれる詩人岡崎純さんに今回の受賞の感想をお聞きしました。

「私は、若い頃から詩に憧れ、詩人の

則武三雄氏、杉本直氏に出合い、詩人の生き方を学びました。また、良き詩友を得て今日まで詩を持続して書いたり読んだりしてきました。賞をお与えくださいましたことは、誠にありがたく、今後の励みにさせていただきます。私の詩の根っこは、福井の風土にあると思っています。福井の自然的風土、文化的風土によって私の感性が育てられ想像力が培われてきたと思っています。

福井の風土における「生と死と愛」をテーマにして「持続する」ことを心掛けてきました。今後も、これまで通り持続して命に触れた詩を書いていき、今回の受賞を励みにして詩集「寂光」以後の作品を詩集にまとめたいと思っています。」と静かにていねいに話していただきました。

福井の自然、歴史、文化を大切に守り、次の世代に伝えたい

箏曲、三絃を指導し、自らも演奏している永田さんに、今回の感想をお聞きしました。「今回の受賞はとても恐縮しています。でも光栄です。この賞は、今までご指導いただいた先生、先輩、私と一緒に学び続けている門下生、そしていつも応援していただいている皆様のお陰です。」と感謝の弁。「音楽に理解がある父母と叔母の誘いで子供心から興味をもってこの道に入りました。これまで師匠の教えの「芸を磨くとともに心を磨け」を信条に学んできましたし、指導しています。すばらしい福井県に生れ育ったことが幸せです。音楽は、自然の中に生れ育って文化となり、創造しながら継承され残っていきます。福井県のすばらしい自然、歴史、文化を大切に守って次の世代に伝えていくことが必要です。今後さらにふるさと福井で、日本の伝統音楽を子ども達に継承するため地域での活動に力を注いでいきたいと思っています。」と明るく語っていただきました。

永田雅秀さん
〈福井市〉

"人の心に響く演奏"を目指して

ソプラノ歌手の飯田さんを訪問しました。「大変光栄です。今まで私の演奏活動を支え、ご指導そして温かく応援してくださっている多くの方々に心より感謝いたします。」とにこやかに話されました。

「歌と音楽が好きな両親のもとで子供の頃から身近に音楽があり自然に音楽の道に進んでいました。「音楽は元気のもと」をモットーに演奏活動を通じて音楽は人を元気にする力があることを実感しています。」

また、地域活動については、「人と人とのつながり、「和」を大切にし、学校公演や病院等でのふれあいコンサートで様々な方々に音楽にふれていただきたい。演奏を聴くだけでなく、一緒に歌ったり、参加型のコンサートで音楽の楽しさを知っていただけるよう活動していきたい。」また、「音楽に国境はなく"人の心に響く演奏"を目指して福井から世界へ発信したいと思っています。」と明るく笑顔いっぱいに話していただきました。

飯田美奈子さん
〈福井市〉

楽しいものを見い出し物語りを作りたい

「ありがとうございます。突然のことでビックリしました。」と開口一番の雀野さんに、作家を目指すことになったきっかけを伺いました。「大阪の大学を卒業して帰郷したものの田舎の生活に楽しみを見い出せずにいました。楽しいものがないのなら楽しいものを自分で見い出そうと思い物語りを作りはじめました。」

また、福井の文化については、「福井らしさの追求が必要と感じています。積極的に福井の良さを見い出し、アピールしようという今までになかった動向に着目しています。この動きを続けることによって、やがておのずから"福井らしさ(福井県独自のもの)"が浮かびあがってくるように思います。これまで目にした総てのものや体験してきたあらゆることが自分にとって大切なことです。今後も精進を続けていきます。」とキラッと光る目でやさしく語っていただきました。

雀野日名子さん
〈福井市〉

げんでん ふるさと文化賞

山﨑灘青さん（書道・地域文化活動）　大野市

昭和二十八年宇野雪村師に師事。奎星賞や毎日書道展で数多く受賞され、県内では、若越書道会、福井県書作家協会の役員として小中学校書道の指導普及に努めるとともに若手書道志望者の育成に貢献しました。また、出身地の旧西谷村巣原地区に伝わる県指定無形民俗文化財「平家踊」の存続と後継者育成のため昭和四十五年に「平家踊保存会」を結成以来、保存会長として会員を指導するなど地域文化の振興発展に尽力されています。

岡崎　純さん（文学）　敦賀市

昭和三十八年処女詩集「重箱」で県文協新人賞、昭和五十二年中日詩賞、平成九年日本詩人クラブ賞などを受賞。昭和三十八年度に敦賀市国語研究会が「つるが子供の詩」を創刊、五号まで編集責任にあたり、以来現在まで継続して出版されています。「岡崎純詩集」をはじめ著書も多く、昭和六十年県内の詩分野の総括団体「福井県詩人懇話会」の創設に参加し、現在も同会の代表として県内の詩文化の発展と後進の育成に尽力されています。

永田雅秀さん（音楽（邦楽））　福井市

六歳で笹屋雅充師に入門し箏の道に入り、十歳で三絃を始める。昭和三十八年（財）正派邦楽準師範、昭和六十三年大師範。昭和四十三年秀萌会を設立し、現在も主宰しています。数々の邦楽コンサートを開催、出演し、古典から現代までの演奏は、高い評価を受けています。また、小学校、中学校からの要請に応え邦楽演奏、箏や三絃の指導を続けており、地域では、生涯学習音楽指導員として公民館などで指導し日本伝統音楽の普及に力を注いでいます。

げんでん 芸術新人賞

飯田美奈子さん（音楽（声楽））　福井市

ソプラノ歌手として活躍し、「魔笛」、「ドン・ジョヴァンニ」、「こうもり」など多数のオペラに出演、その歌と音楽性が高く評価されています。武生音楽祭や福井県文化振興事業団主催のオペラ「森は生きている」などに取組み、オペラの普及と音楽文化の振興に努めています。学校公演や病院での手話をとり入れたふれあいコンサートなどボランティアや社会活動も積極的に行っており今後益々の活躍が期待されています。

雀野日名子さん（文学）　福井市

ライターや翻訳業の傍ら小説の執筆に取組み、福井県在住の若手作家として全国レベルで活躍しています。二〇〇六年ジャイブ小説大賞入選。二〇〇七年「あちん」で『幽』怪談文学賞短編部門大賞を受賞し、二〇〇八年に同作でデビュー。「トンコ」で第十五回日本ホラー小説大賞短編賞受賞。雀野さんの怪談は、最後に"救い"があるのが特徴です。将来性ある幅広い新進の作家として大いに期待されています。

戦国大名

朝倉氏の歴史と文化（三）

―朝倉氏の文化―

文：青木豊昭

(3)花開いた多彩な文化

①猿楽―手猿楽の興隆―

戦国時代、猿楽は寺社での祭礼や武家の饗応儀式に必要なものであった。

そこで、初代孝景は家訓に「四座の猿楽切々呼び下し、見物好まれまじく候。その価を似て国の申楽の器用ならんを上洛させ、仕舞を習わせ候わば、後代まで然るべきか。…」の一条を入れて家臣の猿楽習得奨励策をとった。

三代貞景は能役者の金春禅鳳から賞賛されるほどの能の鑑賞眼があり、四代孝景も難しい演目、「関寺小町」の演能を要望するほど深い能の鑑賞眼があったと伝える。

五代義景は永禄十一年（一五六八）三月、母広徳院が当時女性として最高位の二位の尼に叙されたとき、御礼に一乗谷に滞在中の足利義昭を母の館に迎えて、家臣の服部彦次郎と越前猿楽の一若大夫による演能でもてなした。また、同年五月、義景館へ御成の折には、「翁」・「高砂」・「石橋」など十四の演目を出演者二十七名で催した。出演者のほとんどは義景の家臣で手猿楽であった。大夫は服部彦次郎が務めた。さらに、三日後、義昭の御供衆を招待したときは一若大夫が、翌月、義昭が義景を招いたときは服部彦次郎が務めた。頻繁に手猿楽が催されたことがわかる。

当主義景は舞が、一族の朝倉与六は小鼓打ちが、家臣の萩原・小萩原は謡が上手であった。また、木田ノ庄（福井市）の豪商橘屋の当主は観世座囃方観世国広から長期間指導を受け、太鼓の奥義を伝授された。

これらの事実から初代孝景の手猿楽の育成策は成功し、義景の世に見事に花開いたといえる。

出土した能面の右あご部分を復元予想図の上に載せると―

能面の一部
（「石橋」に用いる獅子口）
一乗谷朝倉氏遺跡出土　同資料館蔵

能面（朝倉尉）
東京国立博物館蔵

ところで、猿楽には能面が必要であるが、越前には著名な面打ちが数多くいて、全国的にみても突出していた。伝説的な石王兵衛、龍右衛門、夜叉、文蔵、小牛、徳若をはじめ、福来、三光坊などである。福来は一乗谷に住み、「朝倉尉」を義景に献上し、「三光尉」は三光坊の創作と伝える。三光坊の流派が越前出目家、近江井関家、大野出目家となって世襲化し、近世へと継承されていった。

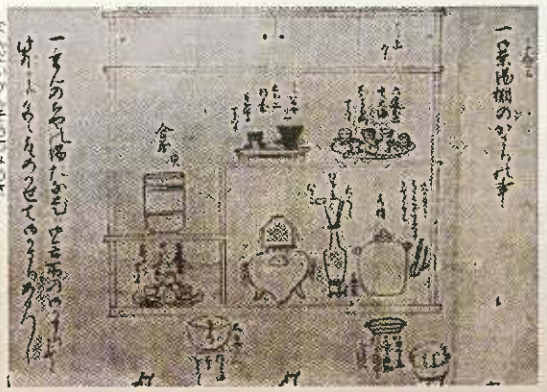
能面の里であった越前で、朝倉氏歴代当主の庇護のもと猿楽が栄えたのである。

②茶の湯の盛行―唐物と和物―

能阿弥は元は朝倉氏の家臣で中尾真能といい、後に室町幕府の六代将軍足利義教と同八代義政に仕えた同朋衆（将軍家所蔵の唐物の管理や座敷飾などを担当した人）のひとりで、「同朋中の名人」といわれた。茶をはじめ、連歌・水墨画・香・立花に優れ、唐物の鑑定にも勝れていた。当代随一の総合芸術家が朝倉氏の元家臣であったことは注目してよい。その素地が越前で育まれたからである。子の芸阿弥、孫の相阿弥も将軍の同朋衆として仕え、前者は京都絵画界の中心にあったし、後者は祖父の著した『君台観左右帳記』の増補版を完成した。

能阿弥の弟子が「茶の湯の祖」といわれる村田珠光であり、その門下の藤田宗理の弟子が「堺流茶の湯の開祖」の武野紹鷗（若狭の守護武田氏の後裔）、さらにその弟子が「茶の湯の大成者」とか、「茶の湯の天下一の名人」と称えられた千利休である。能阿弥は正に茶の湯の原点に位置している。

ところで、義景館跡の回遊式池泉庭園に面した八畳の書院がいわゆる「数寄の座敷」で、唐物による茶の湯が行われていたことがわかる。事実、永禄十一年四月、足利義昭が義景館で元服の際の御成のとき、「御書院」の「御



『君台観左右帳記』（座敷飾・美術品と中国画家についての伝書）
国立歴史民俗博物館蔵

筆者プロフィール

青木 豊昭 氏
Toyoaki Aoki

1944年、福井県生まれ。福井大学教育学部卒業。福井県立博物館学芸課長、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター次長、同所長。福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館館長を経て現在、同館特別顧問。著書『越前若狭地域歴史の謎に挑む』（2006.8.1 刊）。共書『日本城郭大系11』『継体天皇の謎に挑む』『福井県史通史編―原始・古代』『鯖江市史通史編上』『前方後円墳集成中部編』『継体大王と越の国』『福井県不思議事典』他。

復元した書院の座敷飾
一乗谷朝倉氏遺跡資料館提供

茶湯台子の中」は、「小壺・長盆・真の手桶水指・桶尺立・水零・御建蓋・釜・風呂・蓋置」とある。また、「簞笥の中」は「御建蓋二(金銀・同台)・茶筅置・茶碗一」とあることからもうかがえる。

一方、一乗谷朝倉氏遺跡の平井地区で発掘された中級武家屋敷に付属した四畳半の茶の湯座敷は、坪庭を伴う小座敷で和物中心の侘びの茶の湯が行われていたと考えられている。

つまり、当主をはじめ大身の武士や大寺院では書院での唐物による茶の湯が、中級以下の武士や職人、商人などは和物を中心とした侘びの茶の湯が行われていたのである。そして、遺跡出土の遺物量の上からは後者が圧倒的に大勢を占めていたことがわかる。茶の湯が広く普及していたのである。

朝倉氏の茶の湯の盛行の様子はその名物道具によってもうかがい知ることができる。『松屋名物集』や『仙茶集』によれば次のとおりである。

◎＜茶椀＞曜変天目・柿帷天目　◎＜茶入＞木枯肩衝・達磨肩衝・ケイゴン肩衝・朝倉肩衝・朝倉文琳・天筒山茶入・付藻（九十九髪・作物）茄子　◎＜壺＞油滴小壺・象潟葉茶壺◎＜水指＞餌筌水指

茶の湯の道具
一乗谷朝倉氏遺跡出土　同資料館蔵

これらの中でも、「朝倉文琳」（五島美術館蔵）や「付藻茄子」（静嘉堂文庫美術館蔵）の唐物茶入は特に有名である。前者は茶人の間で唐の楊貴妃にもたとえられ、義景のあと織田信長・本能寺（京都）へと伝来し、本能寺文琳ともいわれる大名物である。後者は堂々たる風格があり、天下四茄子の一つで、村田珠光は九十九貫文で買い、朝倉宗滴は五百貫文で買い、それを、越前府中の小袖屋は千貫文で買い、織田信長の手に入ってからは壱万貫文になったという代物である。伝来は足利義満・義政、山名政豊、村田珠光、三好政長、朝倉宗滴・小袖屋・京の袋屋・松永久秀・織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、藤重藤元、藤蔵、岩崎弥之助で名だたる人物を経ている大名物である。

義景は母広徳院が二位の尼に叙せられたとき、足利義昭に茶の湯の御道具（建蓋・同台・香炉・香合・盆）を贈っているが、これらも決して並の道具でなく立派な唐物であったに相違ない。朝倉氏がかなりの勝れた茶の湯道具を所持していたことがうかがえる。

大名物　付藻茄子茶入
静嘉堂文庫美術館蔵

ところで、茶の湯に茶は欠かせないが、文明十六年（一四八四）、奈良興福寺の大乗院尋尊は朝倉氏の家臣へ畑茶を送っている。また、義景の世・宇治の茶師堀氏は毎年朝倉氏へ茶を献上していたが、これは「先祖相伝」であったという。これらも茶の湯の流行を物語っている。

③絵画―良き絵師の国―

永正元年（一五〇四）頃、後柏原天皇は三代貞景が絵をよく描くことを御承知で、御料所河合庄の年貢を多く納めてもらうために、大幅（一幅一間に及ぶ）の唐絵四幅一対の大軸を下賜されたが、「越前には良き絵師」がいるから貞景が喜ぶだろうかと気にされていたことが『宣胤卿記』に収める女房奉書によって知られる。

貞景が好んで絵を描いたことや越前には良き絵師がいたことがわかる。貞景は日本最初の「京中図」を土佐光信に描かせたことでも有名である。

貞景の父氏景は代始御礼として九代将軍義尚へ唐絵三幅一対を、政所代の蜷川親元へ唐絵四幅一対を送るなど唐絵に造詣が深かったことがわかる。

ところで、「越前には良き絵師」とは当時最高の文化人公家三条西実隆のいう「越前国に曽我とて絵かく者」のことで、越前の国絵師曽我派のことである。その系諸は墨谿―宗丈―紹仙―宗誉―紹祥となっていて、先の「良き絵師」とは宗丈を、「絵かく者」とは紹仙をさしている。

団扇図　花鳥図
曽我宗誉筆　真珠庵蔵

五代義景も天神絵像や八幡尊像を描いた。そして、義景館には『鶴の間』や「猿猴の間」があったが、これらは曽我派の描いた襖絵から名付けられたと考えられる。また、義景は唐絵を足利義昭に三幅、本願寺顕如に二幅贈っている。

朝倉氏の歴代当主は絵心があり、唐絵好みであったことが知られ、曽我派の活躍も理解できる。

越前朝倉氏の文化は既に記した諸文化のほか、庭園・建築・和歌・連歌・儒学・医術・武術・焼物・料理・生花などなど実に多彩であって、豊後大友氏、周防大内氏、駿河今川氏の文化と並んで、戦国四大地方文化の一つと高く評価されている。（つづく）

ふるさと福井人物シリーズ

橋本左内（下）

―いち早く近代的な統一国家像を展望―

文／三上一夫

国事に奔走

左内は、一橋派のリーダー格の春嶽の命をうけ、国事に奔走することになる。幕府内の開明的な川路聖謨や岩瀬忠震らの協力を求めるとともに、翌安政五年二月上京し、朝廷側に接近して、慶喜を将軍の後継ぎにすることの急務を説き、内勅を幕府に降下させることに懸命となった。彼はまず内大臣の三条実万に近づき、ついで左大臣近衛忠熙・太閤鷹司政道らの有力公卿に強く働きかけた。

こうした真剣な努力の結果、慶喜を暗に名指して「年長・英傑で人望のあるもの」を将軍後嗣に定めよとの内勅が出るところまでこぎつけた。ところが一方、井伊直弼の命をうけた謀臣長野主膳らの巧みな反対工作により、関白九条尚忠が内勅の文面を途中でさえぎって、「年長・英傑・人望」の三つの要件をけずり、事実上一橋派にはなんの効力のないものにした。しかも南紀派の強引な推挙により、四月二十三日井伊が大老に就任すると、ついに一橋派は完敗のうき目を見なければならなくなる。

井伊は強引に、六月十九日朝廷の勅許を得ずに日米通商条約に調印し、さらに同月二十五日将軍の後嗣ぎを徳川慶福に決定したのである。このさい一橋派では春嶽をはじめとして、井伊の激しい攻勢に真向から対決したのはいうまでもない。井伊は一橋派大名に対する弾圧の手はじめとして、春嶽には水戸の斉昭らとともに、隠居・謹慎の処分を行った。そのため左内の活動もまったく封じ込められ、彼が真剣に画策した雄藩連合の「徳川統一国家」の構想はすっかり崩れ去ったのである。

京都・福井藩邸趾（京都国際ホテル）

二十六歳の生涯

その後水戸・長州・薩摩諸藩の志士層の反発が起こると、井伊大老は反対派一掃のための「安政の大獄」を断固決行する。ついに左内も、安政五年十月二十二日幕吏による藩邸曹舎の捜索をうけ、翌日身柄が拘束された。その後評定所でたびたび取り調べをうけたが、左内としては、主君の命で国事に奔走したことで死罪に処せられるとは、少しも考えなかったようである。

左内は翌六年十月二日入牢を言い渡された。伝馬町獄舎に移されてから四日たった同月六日、つまり彼が処刑される前日、左内は獄中から藩の石原甚十郎あてに差し出したとみられる密書のなかで、「先日の取り調べの口述書で、主君の内命で勅を願ったという言葉があったのを、心が乱れていてとんと気付かずに同意してしまった。その点今一度申し開きをさせてほしい。（中略）夜分とんと眠れないので安眠できるよう丹薬でも差し入れるようお願いする（後略）」と述べている。

死の幻影におびえながら、主君の春嶽の身に災いが及ばないことを念じ、ぜひ口述書を改めたいと切言するのだった。このようにいたく心を痛めた左内は翌七日、評定所に呼び出されて、「公儀を憚らざるいたし方」という理由で死罪が申し渡された。そして即日獄内の刑場で、二十六歳の生涯を閉じたのである。五手奉行の判決は「遠島」

筆者プロフィール

三上　一夫氏
Kazuo Mikami

1921年朝鮮京城府生まれ。京城帝国大学史学科卒業。福井県立大野高等学校長・福井県教育研究所長などを経て、現在福井工業大学名誉教授。1989年に福井県文化賞、2004年に福井新聞文化賞を受賞。主要著書に『公武合体論の研究―越前藩幕末維新史分析』、『横井小楠の新政治社会像』、最近では『幕末維新と松平春嶽』など多数。

と決まったのが、井伊による附札で死罪になったということを春嶽の回顧録『逸事史補』が伝えている。

西郷隆盛も驚く学才

安政二年（一八五五）十二月、二十二歳の左内が薩摩藩の江戸屋敷に西郷隆盛を訪ねたときのことである。ちょうど隆盛は、屋敷の内庭で若侍にすもうをとらせ、それを縁側からながめていた。隆盛は左内の訪問に気づきながら、大した人物ではないとみて、「しばらく待たせておけ」といって、平気ですもうを観戦していた。すもうが終わってはじめて隆盛は左内と対談したが、左内の迫力に満ちた口調で、厳しい外圧に見舞われた日本の現状と複雑な国際情勢を真剣に説いたのに、隆盛はすっかりどぎもを抜かれた。翌日隆盛は羽織袴に威儀を正して福井藩邸の左内を訪ね、前日の非礼を詫びたという。

左内愛用の桐の本箱
（福井市立郷土歴史博物館所蔵）

ところで隆盛は明治十年（一八七七）九月、西南戦争で敗れ、鹿児島の城山で非業の最期を遂げたが、彼の軍用カバンの中から安政四年（一八五七）十二月十四日に隆盛にあてた左内の手紙が見付かった。これは二十年も前のものであるが、隆盛は心から尊敬する左内の手紙を死ぬまで肌身はなさず大事に持ちつづけたのである。

引き継がれる左内の精神

左内の卓越した精神は、全国的統一国家が成立した明治以降も、見事に引き継がれる。たとえば近代日本の偉大な思想家であり美術評論家でもある岡倉天心は、その名著『東洋の理想』の冒頭に、「アジアは一つである」という著名な言葉を掲げるが、これは彼が幼少年のころから、父親の郷里の福井をこよなく愛するなかで、左内の統一国家論に根ざすアジア観に、深い感銘をうけたことによるわけである。実は、天心の乳母、つねは、左内の遠縁に当たり、つねは「大きくなったら左内様のような立派な人になって下さい」と天心にいい聞かせたという。

左内のめざす近代的統一国家論は、前述したように、日本近海にせまる西欧列強の強じんな勢力つまり「外圧」に対する防衛線を日本全土だけでなく、朝鮮・満州・中国・インドなどアジア全域に拡大することを主張したが、その点左内の精神を引き継いで、「アジアは一つである」と提唱した天心の率直な心情をうかがうことができる。

橋本左内宅跡
（初湯の井、福井市春山二丁目）

毎年春、福井市春山二丁目の左内生誕の地で行われる「生誕祭」、秋の命日の日に左内公園の墓前で催される「墓前祭」には、地元の春山・足羽両小学校の児童が参列して、献花と献茶を行っている。

また福井県内の中学校では、新春、「立志式」という儀式を行うところが少なくない。十五歳になった二年生を中心に、三年・一年生と二年生の父兄らが立ち会って、二年生代表が決意のほどを誓い、他の学年の生徒代表が彼らを激励し、さらに校長や講師の講話などが行われる。たしかに左内の啓発録とのかかわりで、極めて意義深い行事といえよう。

橋本家墓所（福井市左内町）

左内が平成二十一年に、没後百五十年を迎えるのを機会に、「橋本左内と弟綱常」と題する特別展が、その前年の七月九日より九月七日まで福井市立郷土歴史博物館（福井市宝永三―十二―一）で開催された。綱常が家業を継いで医師となり、東京帝国大学医科大学教授、軍医総監などを歴任、日本赤十字社の設立に尽力し、明治二十年（一八八七）同社病院の初代院長となった人物である。

書状や日本画など三十五点を集めた特別展のなかに、掛け軸として残存する「啓発録の原本」（宮内庁所蔵）が含まれる。なお左内の没後、綱常が左内の上司であった福井藩士中根雪江に送った書簡も紹介。綱常が左内の墓前にささげたという漢詩には、亡き長兄を心から慕う気持ちが込められている。

（おわり）

第11回

ふるさと大賞写真コンテスト

平成十年度より郷土福井の自然、歴史、文化等の地域資源を題材とした「ふるさと大賞」写真コンテスト顕彰事業を行っています。第十一回目となる二十年度は、過去最多の六〇六点の応募がありました。審査の結果、六十一点の入賞作品（別表のとおり）が選ばれました。

テーマ

ふるさとふくいの輝き

ふるさと大賞

吉川 悦郎 さん（坂井市）

「春風に泳ぐ」

強い風と潮騒の音が写真の中から飛び出してくる様に感じられ、「ふるさと大賞」にふさわしい作品になっています。一般に風景カメラマンは「光」、「風」、「音」、が表現出来れば一人前だと云われています。吉川氏の写真には強風にたなびく鯉幟り、三段に打ち寄せる白波、雄島の赤い橋の輝きの逆光線と奥行感で被写体の素材を最高に表現されていて、画面構成の基本である「水平線の構成」の様で、すばらしい写真に仕上がっています。

（講評／八木 隆氏）

ふるさと賞

一般の部「半夏生の日」

松村　透 さん（勝山市）

きちんと並べられた数十匹の焼き鯖が圧巻です。少し低い位置から縦位置で画面の半分以上を焼き鯖で配したことが成功しています。また魚屋の女将さんの表情がとてもいいですね。笑顔が輝いていて焼き鯖が一段と美味しそうに感じます。他県から見ると丸ごと１匹の鯖を竹串に刺して焼く焼き方は大変珍しいということをTVで放映していましたが、福井県民はこれが当たり前です。

（講評／三好 勝己氏）

一般の部「掛声合わせて」

髙田　正年 さん（小浜市）

若狭地方で最も大きな秋祭り「放生祭」。赤い幕やきらびやかな装飾品に飾られた山車の二階には、そろいの衣装とはちまきを締めた子どもたちがぎっしり。全員が大きく口を開け、一生懸命声を出す姿がたくましい。気持ちを一つにして祭りを盛り上げる子どもたちをうまくとらえています。正面の高いところから望遠レンズで撮っているので、画面が引き締まっています。笛や太鼓に合わせた元気いっぱいかけ声が聞こえてくるようです。

（講評／勝山 章司氏）

作品展示会場

これらの作品を多くの方に御覧いただくために、県内2会場で作品展示会を開きました。

敦賀会場　げんでんふれあいギャラリー
2月3日(火)～2月15日(日)

福井会場　ショッピングシティ「ベル」
2月20日(金)～2月25日(水)

審査員

審査委員長　八木　隆（写真家）
審査委員　三好　勝巳（(株)フジカラー北陸 福井支社長）
勝山　章司（(株)福井新聞社編集局写真映像部長）
野田　訓生（福井県立美術館学芸員）
水谷内健次（写真家）
河島　進（財団法人げんでんふれあい福井財団理事長）
並木　繁（日本原子力発電(株)敦賀地区本部業務・立地部長）
（敬称略）

優秀賞

岸　隆介さん（敦賀市）

一般の部「夏・水島」

雲が浮かぶ空。光を反射しきらきら輝く海辺。魚を採ろうとする赤いシャツを着た少女が振り返った瞬間。どれもが夏を賛歌しています。そして何より美しいのは海の青。グラデーションをなして微妙に変化する水島の海の色を巧みにとらえました。

（講評／水谷内 健次氏）

金子　敏己さん（鯖江市）

一般の部「釣り日和」

燃えさかるように夕日が落ちていきます。空も海も真っ赤に染まる見事な夕焼けです。つり人達も、いっとき漁のことは忘れ、この雄大な光景に見入っているのでしょう。バイクやつりざおのシルエットもかわいらしく、よいポイントとなっています。満ち足りた一日の終りを感じさせる作品です。

（講評／水谷内 健次氏）

松村　真希さん（勝山市）

学生の部「ひと休み」

伝統行事「谷のはやしこみ」は、華やかな仮装行列の祭事です。たくさんのカメラマンが集まる中、作者は祭りの中心となる道化役にねらいを定めて、チャンスを待っていたのでしょうか。休息時間のユーモラスで少し不思議な情景を、正面から大胆な構図でとらえました。左右対称のようでいて微妙にズレた二人の姿かたちは、「間違い探し」のように見る視線をリズミカルに往復させて楽しませてくれます。お面と笠に隠れた表情が見たくなります。（講評／野田 訓生氏）

斉藤　敦子さん（坂井市）

一般の部「子供の笑顔」

やぐらの上で、笛や三味線に合わせて浮かれるようにして踊りながら太鼓をたたく女の子たち。赤いじゅばんにたすき掛けのカラフルな衣装は祭りを盛り上げます。広角レンズで被写体に近寄って撮っているので親密感と力強さが伝わります。重ならないようにした人物の配置やそれぞれの表情、軽やかな動きを絶妙のシャッターチャンスでとらえています。春の訪れを喜ぶ「勝山左義長」。うきうきとした気分で祭りを楽しむ笑顔が可愛い。

（講評／勝山 章司氏）

入賞作品一覧（敬称略）

大賞	春風に泳ぐ	吉川　悦郎	小浜市	坂井市
特別賞 一般	掛声合わせて	高田　正年	小浜市	勝山市
特別賞 学生	半夏生の日	松村　透	勝山市	勝山市
優秀賞 一般	釣り日和	金子　敏己	鯖江市	鯖江市
優秀賞 一般	夏・水島	岸　隆介	敦賀市	敦賀市
優秀賞 学生	子供の笑顔	斉藤　敦子	坂井市	坂井市
優秀賞 学生	ひと休み	松村　真希	勝山市	勝山市
入選 一般	夕陽	清水　輝夫	福井市	福井市
入選 一般	結婚	市原　美代子	福井市	福井市
入選 一般	笑顔の場	新野　正弘	福井市	福井市
入選 一般	ファミリー	山口　きく美	鯖江市	鯖江市
入選 一般	夕日に	田中　福一	勝山市	勝山市
入選 一般	プロフェッショナル	三上　彰	福井市	福井市
入選 一般	祭の陰に頑張る	島袋　隆志	鯖江市	鯖江市
入選 一般	春の訪れ	久野　和市	福井市	福井市
入選 一般	赤い帽	鈴木　虎雄	あわら市	あわら市
入選 一般	これが欲しいヨ～	塩田　裕子	鯖江市	鯖江市
入選 一般	月夜の今昔物語り	岡崎　泰仁門	福井市	福井市
入選 一般	人力車で お嫁入り	山中　正洋	福井市	福井市
入選 一般	冬の京の宴	嶋田　裕太	福井市	福井市
入選 一般	老友	原　満市	越前町	越前町
入選 一般	祭りの場	高木　美佳子	福井市	福井市
入選 一般	赤い舞踊	河村　久男	福井市	福井市
入選 一般	夏の思い出	河尻　治	(おおい町)	(おおい町)
入選 一般	静寂	渡辺　敬治	福井市	福井市
入選 一般	早朝日の中で!!	清水　孝之	鯖江市	鯖江市
入選 一般	尾さまぐ	吉田　佳代子	福井市	福井市
入選 一般	夏雲のようにひ	竹内　弘子	越前市	越前市
入選 一般	昭和の日向	小川　昭仁	坂井市	坂井市
入選 一般	元気やのー	平田　雅信	鯖江市	鯖江市
入選 一般	里山家族 嶺森の海	吉本　興一	敦賀市	敦賀市
入選 一般	ワーマンパワー	平池　光子	鯖江市	鯖江市
入選 一般	平和の祈り	吉山　睦子	鯖江市	鯖江市
入選 一般	石垣の夜	小林　容子	越前市	越前市
入選 一般	いっぱいえのり	荒竹　未沙希	鯖江市	鯖江市
佳作 学生	赤兵バレー	酒井　文子	鯖江市	鯖江市
佳作 学生	中秋の名月	岡山　真理	福井市	福井市
佳作 学生	少年少女合唱団	玉寄　翔大	福井市	福井市
佳作 一般	雪の中小屋	瀬川　亞司	福井市	福井市
佳作 一般	明けゆく村々	柳木　哲雄	坂井市	坂井市
佳作 一般	天空の舞	結城　邑子	敦賀市	敦賀市
佳作 一般	日本文化に魅せられて	森　勲雄	福井市	福井市
佳作 一般	少女の咲く頃	斉藤　武吉	敦賀市	敦賀市
佳作 一般	四季三題話	松山　京弘	福井市	福井市
佳作 一般	田植えの頃	田中　清	敦賀市	敦賀市
佳作 一般	八十八月	土田　弘子	越前市	越前市
佳作 一般	内灯漁の夜明	佐々木　喜四郎	鯖江市	鯖江市
佳作 一般	この満心年	足谷川　弘子	鯖江市	鯖江市
佳作 一般	実りを願さん	竹中　進	敦賀市	敦賀市
佳作 一般	いのちの輝き	一瀬　江利	越前市	越前市
佳作 一般	トキメキ	谷口　修	越前市	越前市
佳作 一般	自然の美	三田　清	勝山市	勝山市
佳作 一般	祭りを盛り上げるチビッ子	前田　繁雄	福井市	福井市
佳作 一般	スポットライト	川崎　未千	越前市	越前市
佳作 一般	秋深	伊藤　邦夫	坂井市	坂井市
佳作 一般	雅楽祭	岡山　幸平	越前市	越前市
佳作 一般	秋にまる	吉岡　大地	福井市	福井市
佳作 一般	空の海 波の華	山内　哲夫	敦賀市	敦賀市
佳作 一般	大はくれつ	土田　武	越前市	越前市
佳作 一般	ピンチをチャンスに!	近野　光平	越前市	越前市
佳作 一般	精神統一	林　友吉	越前市	越前市

福井県指定無形民俗文化財
「柴の実入れ」
高浜町

高浜町の青海神社で二月十一日、豊作豊漁、商売繁盛を祈願し、福井県指定無形民俗文化財の「柴の実入れ」神事が今年も若狭各地や舞鶴市、宮津市などから氏子のほか農業、漁業関係者ら約九十人参列のもとに行われました。

青海神社は、風光明媚な若狭富士と呼ばれている青葉山を望む高浜町青の国道二十七号沿いに鎮座し、古代より若狭丹後の総鎮守と伝えられています。

風光明媚な青葉山

柴の実入れ神事

この神事は、旧青郷村の青、日置、関屋、横津海、出合の五集落から禰宜各一名、宮総代一名計十名が出役し当日までに神事に用いるカシの木のシバを氏子数だけ用意しておきます。この準備作業をシバタバネと言い、シバはカシの枝三本と半紙に包んだ川石に稲穂一本を結えたもので、実った稲束を意味するとされています。

宮司さんによって神事がとり行われました

近年は、「柴祈念」とも呼ばれる「柴の実入れ」の神事は、午前十一時から青海神社の山下宮司によって、修祓・開扉・献饌・祝詞奉上の式次第にのっとり厳粛に行われました。

このあと「実入れの儀」では、烏帽子に狩衣を着たシバカンヌシ（今年の神主役は岸本真明さん）が拝殿中央に進み出てうやうやしく神のお告げとして「柴の実入れ」の宜詞を奉読します。宜詞を三回に分けて読み上げますが、読み終わるたびに両脇に臨席していた各区からの七名（青一名、横津海・関屋・日置各二名）の禰宜（実入れ役のシバタタキ）が立ち上がり「ウォー」と喚声を上げながらシバカンヌシに襲いかかり背中を思いきり叩きます。

「シバカンヌシ」の宜詞奉読

儀式後にシバの葉っぱが落ちるのが良いとされていることから力を込めて柴を振り下ろします。よく叩けば叩くほど荒天になっても稲の実入りがよく豊作になると伝えられています。このあと、禰宜、町長、漁業組合代表、商工関係者、氏子総代などが玉串奉奠を行い、撤饌・閉扉して神事は終わります。

実入れ役のシバタタキがシバカンヌシの背中を力いっぱいたたきます

豊作・豊漁のお守り

シバカンヌシに振り下ろして叩くこの神事は、柴に神の力を乗り移らせようとするもので、シバは、神饌のウシノシタモチとともに氏子各戸に二本づつ配布し、御幣をつけて床の間に飾ります。また、飛散するシバの葉を魚に見立て大漁を祈願することも行われることから、近年漁撈予祝の意味合いも帯びていることが注目されます。漁業関係者は、二尺ばかりの青竹に護符をはさんだ竿をもらいうけ船室にお守りとしてまつります。

青海神社拝殿前に氏子らが参拝

柴の実入れの由来

もとは、旧暦の一月三日に行われ、ツクリゾメとかクワモチハジメと呼ばれ、若狭地方一帯に広く分布する稲作の予祝儀礼に関する行事です。

かつては、ツクリゾメの日にユリダ（ヌルデ）の木で作った牛玉木を田に差し、大根とカブラを植えてお鏡を一重ね供え、三鍬ほどオコシゾメをしてシバを差し、恵方に向かって豊作を祈りました。

「柴の実入れ」の神事は大正十二年に筆書された「青海神社鎮座の伝承」に「神事伝承―柴の味入（祈願祭）」として記録があり、当時とあまり変わらずに継承されています。

美人詠花之図　一幅　上島鳳山　筆

可憐に花を咲かせる枝垂桜のもとに、小袖に豪華な内掛を羽織った美しい女性が佇んでいます。手には筆と短冊が添えられていますが、桜を愛でながら歌を詠もうとしているところでしょうか。女性の表情には、凛とした気品漂う風情が感じられます。

本図のような美しい女性像は、風俗画の群像に登場する女性をクローズアップさせたものとして江戸時代に入り描かれるようになりました。これらは、はじめ美人絵と称され人気を博しましたが、江戸では多色刷りの鮮やかな錦絵と呼ばれる版画が流行したのに対し、上方では版画はほとんど制作されず、本図のような肉筆による一枚ものが好まれました。とくに、円山・四条派によるふっくらとした愛らしい女性像が上方では主流となり、明治期に入ってからも同派の画家により踏襲されました。

筆者の上島鳳山もその一人で、画を円山派の木村貫山や渡辺祥益に学び美人画を研鑽しました。本図の小袖にみる鹿子絞りや内掛の雲鶴模様などは緻密に描かれ、一筆一筆に鳳山の画家としての意気込みが感じられます。

上島鳳山は、本姓を辻氏、名は寿治郎、別に琴中、範古、彫龍閣と号し、画室を鳳鳴画屋といいました。明治8年に岡山県笠岡に出生。明治33年（1900）25歳の時、上島くにと結婚、大阪に住しました。とくに美人画に才能を発揮し、京阪神の有識者間に高い評価を受けたことで知られています。

□絹本着色
□縦131.0cm　横71.0cm
□近代
□落款　「鳳山寿」
□印章　「?」白文方印
　　「鳳山」朱文方印

シリーズ24

福井の文学碑

国語学者 橋本進吉

敦賀市出身の国語学者「橋本進吉博士顕彰碑」が敦賀市立西小学校（敦賀市結城町）の正面北側の校庭に建てられています。

碑の裏面には次のとおり碑文が刻まれています。

橋本進吉博士顕彰碑と杉原正子氏の歌碑

碑文（原文）

文学博士橋本進吉先生は、医家謙吉氏の長男として敦賀晴明で誕生された。五歳の時父君を失い、爾来、母堂の慈みのうちに成長された。就将小学校卒業の後、京都の中学校から第三高等学校に進み、東京帝国大学文科大学で言語学を修められ、卒業に際しては恩賜の銀時計を拝受する名誉を担われた。その後、同大学の国語研究室に助手として勤務、さらに、助教授、教授として国語国文学第一講座を担任され、国語学の研究と後進の育成とに努められること三十余年、退官後まもない昭和二十年一月三十日六十二歳で没せられた。墓所は市内来迎寺にある。

先生は国語学界に不滅の偉大な足跡を残された。まず、上代の文献に特別の仮名の用法のあること、すなわち特殊仮名遣を発見されて、それが音韻上の特質に基づくものであることを立証され、日本語の歴史、起源、また古典の解読に新紀元を開かれた。先生はまた、文法論にすぐれた体系を樹立し、かつ、文法の史的展開を実証的にあとづけられ、一方、明快で親切な中等教科書新文典を編せられた。そのほか、国語学の諸分野にわたってすぐれた業績を示され、わが国の近代的な実証的国語研究の礎と仰がれる。ここに先生の学恩を受け学徳を慕仰するものが相はかって、先生の母校就将小学校、現西小学校の校庭にこの顕彰の碑を建てるのは、郷土の先輩の偉業によって後進の志を励まし、かつ先生の開かれた学問の道をいよいよ発展させることを期するためである。碑面の題字は、日本学士院会員文学博士久松潜一先生の筆による。

昭和四十六年三月十二日　岩淵悦太郎

岩淵悦太郎先生は、当時国立国語研究所所長でした。

生いたち

橋本進吉博士

橋本進吉博士は、明治十五年（一八八二）十二月二十四日、敦賀郡敦賀町晴明（現在の敦賀市相生町）で医師橋本謙吉の長男として生まれました。敦賀の就将小学校（西小学校の前身）を卒業、京都府中学校（のちの府立一中）、第三高等学校を経て、東京帝大文科大学言語科に入学、明治三十九年七月に卒業後、大学院に進み、間もなく文部省の国語調査委員会に補助員として入り、明治四十二年（一九〇九）三月東京帝大文科大学（文学部）の助手。その後十八年間、上田万年博士のもとで国語研究室に勤務し黙々と研究を重ねた。昭和二年（一九二七）二月、四十六歳で助教授となり定年退官した上田万年博士のあとを受けて国語国文学第一講座を担任した。昭和四年（一九二九）六月、教授に昇進、昭和九年（一九三四）、「文禄元年天草版吉利支丹教義の用語について」と題した学位論文で文学博士になりました。昭和十八年三月、東京帝国大学教授を定年退官し、わずか二年後の昭和二十年（一九四五）一月三十日に死去されました。

橋本進吉博士の研究

橋本博士の独特の研究は、「古代日本語の音韻」に関するもので、「古代の日本語は、現在のイ、ロ、ハ、四十八文字よりもっと多くの発音内容を持っていた」ことを発見し研究を続けました。また、大正六年（一九一七）雑誌「帝国文学」に「国語仮名遣研究史上の一発見―石塚龍麿の仮名遣奥山路について―」を発表し、江戸時代の学者で本居宣長の弟子石塚龍麿の研究をさらに発展させ完璧なものにしたと言われています。

上代のかなは万葉仮名（漢字の仮名）であるが二通りあり、このつかい方を区別するために、甲類・乙類と名づけました。

日本語の文法についても「国語法要説」など多くの研究があり、この中で文の外形上の特徴をあげ

一、文は音の連続である

二、文の前後には必ず音の切れ目がある

三、文の終りには特殊の音調が加わるといい、具体的に詳しく述べています。

ここでは、研究の一部を紹介しましたが、目立たない地味な研究に辛抱強く精力を傾け日本語の研究の最も基礎的な面に力を注がれました。

杉原正子氏の歌碑

橋本進吉博士の顕彰碑の右横に、

大いなる國語学者のふるさとは
松美しく海清き町

と刻んだ敦賀の歌人杉原正子さんの歌碑が建てられています。

橋本進吉博士の研究の偉業をたたえ名勝気比の松原の緑と海の美しさと水清きふるさと敦賀を詠まれたものです。

昭和四十六年三月十二日には、顕彰碑竣工式が、橋本進吉博士の夫人、長男の研一氏夫妻はじめ多くの関係者出席のもと厳粛にとり行われました。

橋本進吉博士顕彰碑　竣工式
昭和46年3月12日　敦賀西小学校にて
永江秀雄氏提供（本誌30号参照）

青少年育成福井県民会議発行の「若越山脈（第六集）および橋本進吉博士顕彰碑建立事務局発行の「橋本進吉博士を偲ぶ」を参考にさせていただきました。

第11回 能を楽しむ会

日本古来の伝統芸能に親しんでいただくため、当財団では、十一月十八日（火）、観世流能役者の味方玄さんをはじめ能楽師らを招き「能を楽しむ会」（日本原電協賛）を敦賀市プラザ萬象の能楽堂で開きました。

当日、昼の部は、敦賀市内の中学生（粟野、角鹿、東浦）約三一〇人を体験学習の一環として鑑賞していただくため招待しました。

公演に先立ち、味方玄さんから「地謡座」「後座」「橋掛り」など能舞台の構成や「シテ方」「ワキ方」「囃子方」という役割分担など基本的な説明と演目の「巴」のあらすじの解説をうけました。さらに、「大鼓」「小鼓」「太鼓」などの能の囃子に使われる楽器の説明を聞いた後、中学生の代表が舞台に上がり楽器をたたく体験をしました。

その後「巴」が演ぜられ、生徒たちは、能役者の立ち振る舞や囃し方の演奏など伝統ある能を見入っていました。

中学生の「鼓」体験

夜の部は、約四五〇人の一般の愛好者らが会場に集まり、味方健さんから演目の解説を聞いた後、主役の味方玄さんが豪快に「鞍馬天狗」の演技を披露。観客は、幽玄な中にも迫力ある演技を堪能し大きな拍手を行っていました。

味方玄さん演じる「鞍馬天狗」

【あらすじ】

鞍馬天狗は、平治の乱で平清盛に滅ぼされた源氏の遺児沙那王（牛若丸）は、鞍馬山の寺へ預けられていました。春爛漫の鞍馬山、見知らぬ山伏が現れ、沙那王の孤独に心を寄せ花の名所を一緒に見てまわります。沙那王が名を問うと、山伏はこの山に年経たる大天狗と明かします。

大天狗から沙那王の剣術の相手を命じられた木の葉天狗は、稽古をつける。大天狗は、平家を討とうという殊勝な志を汲み、兵法の奥義を伝授し、沙那王の活躍による平家討伐の成就と源氏再興を予言し、戦の折は守護することを約束します。

第2回 ふくいふるさと祭り開催
第35回 福井県民俗芸能大会

第二回「ふくいふるさとの祭り」が十月十八日に若狭町のパレア若狭音楽ホールで盛大に開催されました。

この祭りは、地域の人々によってまもり受け継がれてきた民俗芸能の継承、発展を図るため昭和四十五年から福井県民俗芸能大会が開催されてきましたが、平成十九年度から県民の皆さんが身近に親しむ交流の場として福井県が開催しています。

今回の出演は七団体で、特に、次世代の地域文化の担い手である子供達がハツラツと元気いっぱいに披露していました。出演団体を次のとおり紹介します。

若狭能倉座の神事能（若狭能倉座）

若狭猿楽の倉座は室町時代から続く猿楽座で、江戸時代には小浜藩主の保護を受けました。現在でも若狭各地の神社祭礼で、古式ゆかしい神事能を奉納しています。（県指定無形民俗文化財）

雲浜獅子（雲浜獅子保存会）

川越藩主だった酒井忠勝が、小浜へ国替となった際に獅子舞の役者を連れてきたのが始まりとされます。老若二頭の獅子が雌獅子をめぐって争い、最後は仲直りして舞い納めます。（県指定無形民俗文化財）

丸岡おじゃれ（丸岡おじゃれ保存会）

「丸岡おじゃれ」は、約百年前に丸岡城の国宝指定と城下町の観光地化を目指してつくられました。「城が見たけりゃ丸岡におじゃれ（ソレ）」という唄にあわせて踊り、愛嬌ある芸風が持ち味です。

文七踊（名田庄文七踊保存会）

江戸時代に、雁金文七という人物を題材に作られた踊りが京都で流行し、やがて若狭地方に伝わりました。浄瑠璃調の音頭にあわせて盆踊りとして踊られています。（県指定無形民俗文化財）

左義長ばやし（勝山左義長ばやし保存会）

二月の最終週末に行われる勝山左義長では、町の各所に楢が出て、長襦袢姿で面白おかしい身振りをしながら太鼓を打つ、左義長ばやしが演奏されます。（「勝山左義長」県指定無形民俗文化財）

楽しく演じる「勝山左義長ばやし」

六斎念仏（三宅六斎念仏保存会）

お盆に村の家々や寺で、仏の供養として踊ります。ゆかた姿の子供たちが太鼓を打ちながら踊り、大人の男たちは鉦を叩きながら念仏を唱えます。（国選択・県指定無形民俗文化財）

日向神楽（長畝日向神楽保存会）

江戸時代、丸岡藩主となった有馬氏が、九州の日向から神楽役者を連れてきたのが始まりとされます。神話を題材とした舞や、子供の初々しい舞などがあります。（県指定無形民俗文化財）

平成21年度の財団事業計画・予算決まる

ふくいの文化活動支援など6重点施策を推進

平成二十一年度における財団の事業計画と収支予算が三月十二日に開催した第三十四回評議員会と第三十三回理事会で可決承認されました。

平成二十一年度は、財団がこれまで積み重ねてきた活動実績と多くの方々との絆を大切にして、ふくいの文化活動育成支援をはじめとする六つの重点施策を推進します。

この重点施策を実施するための事業計画とこれに関連する予算を編成しました。

21年度事業計画および予算案を審議する第33回理事会

予算総額(一般会計)9,000万円

21年度予算は、総額（一般会計）9,000万円とし、重点施策を焦点に予算配分を行い、事業費総額7,470万円を計上。財団寄付行為で規定している事業区分の内訳は次のとおりです。

1. 地域文化の振興事業 2,030万円
2. ふれあい・ゆとりの創造事業 990万円
3. 芸術観賞機会の提供 文化創造事業 3,230万円
4. 優れた文化活動に対する顕彰事業 750万円
5. その他の事業（ホームページ、広報誌の発行など） 470万円

6重点施策

1. 文化団体等の活動を支援する助成事業の充実
2. ふくい県民総合文化祭および県内高等学校文化部活動の支援
3. 地域に根ざしたふれあい活動の推進
4. 文化、芸術を愛する県民風土を高める顕彰事業の定着化
5. 魅力ある文化イベント提供事業の推進
6. 信頼される財団として広報・広聴活動の展開

第11回 ふるさと大賞写真コンテスト入賞作品展

“ふるさとの輝き”をテーマに

第十一回ふるさと大賞写真コンテストの入賞作品展を二月三日から二月十五日まで、げんでんふれあいギャラリー（敦賀市）で、二月二十日から二月二十五日までショッピングシティ「ベル」（福井市）の二会場で開きました。

会場に、応募作品六百六点の中から選ばれた、ふるさと大賞一点、ふるさと賞二点、優秀賞四点をはじめ六十一点の作品を展示しました。

コンテスト審査委員長の八木隆さんは、「今回の入賞作品は、「ふるさとの輝き」をよく表現されているものばかりです。上位の入賞には、写真の「モチーフ」、光の状態（立体感）、画面構成など写真の基本を身につけることが重要です。次回に素晴らしい感性のある作品を出品してください。」と総評されました。

両会場とも写真愛好家やファンの方々が多く訪れ、個性的で感性豊かな「ふるさとふくいの輝き」の作品に見入っていました。

「ふるさと大賞」を見入る人たち（げんでんふれあいギャラリー・敦賀市）

入賞作品を鑑賞に訪れた写真ファン（ショッピングシティ「ベル」・福井市）

第73回 福井県かきぞめ競書大会

げんでんふれあい福井財団特別協賛

第七十三回かきぞめ競書大会（福井新聞社主催、（社）若越書道会共催、当財団特別協賛）に、県内の小、中、高校生、大学生から七万千百六十八点の応募作品が寄せられ、第一次審査を通過した二千五百九十二人が一月二十四日に県内十二会場で席上揮ごうに臨みました。

この作品の二次審査会が、一月二十五日に若越書道会の河合清仙会長ら審査員により慎重に行われました。その結果、最優秀の大賞に、小竹瑠衣さん（福井・豊小）、井上亜由美さん（社中）、酒井智里さん（仁愛女子高）、太田祐貴さん（佛教大）の四人が選ばれ、また推薦百四十七点、準推薦二百二十一点、奨励賞二十七点が決まりました。

二月八日、福井新聞社・風の森ホールで表彰式が行われ、財団では、小、中学生の推薦作品の中から釜谷菜生さん（粟野小）ほか十名に「げんでんふれあい福井財団賞」を贈りました。

表彰式で財団賞を受ける釜谷菜生さん

席上揮ごうに挑む小学生（敦賀市立南小学校）

第9回 日英小学生絵画交流展

「私たちのくらし」をテーマに

日本とイギリスの小学生の絵画交流展を当財団と日本原電、BNGS社（英国核燃料会社）が共催しました。

作品展には、英国、西カンブリア地方の五小学校から五十点と敦賀市内五小学校（松原、中央、省見、常宮、西浦）から三十九点、茨城県東海村から三十五点、計百二十四点が出展されました。「私たちのくらし」をテーマに描いた作品で家族や友達、祭、遊びなど、両国の子供達から見たそれぞれの暮らしを楽しくよく描かれています。

十二月六日から十四日まで敦賀原子力館で、十二月十六日から二十八日までげんでんふれあいギャラリーで展示し、会場に訪れた人達は、子供達の感性を興味深く熱心に鑑賞していました。

日英小学生絵画交流展開会式（敦賀原子力館）

日英の友好を深めた絵画交流展（敦賀原子力館）

子どもミュージカル「イルカのラボちゃん」

県内3会場で熱演

平成九年に起こった「ナホトカ号」重油流出事故の時、イルカの赤ちゃんの救出を描いた絵本「イルカのラボちゃん」を舞台化した子どもミュージカル（演出・岡田利雄）が十二月十三日、みくに文化未来館で公演されました。このミュージカルは、坂井市の市民劇団「紅の会」が主催（当財団協賛）し、総勢七十七人の子ども役者が元気いっぱい歌と踊りで、命と自然を守ることの大切さを熱演しました。

歌って踊る子ども役者（みくに未来館）

物語りは、十一年前の冬の寒い日。突然「ゴー」という音とともに海が真っ黒になり、越前松島水族館のイルカさんのプールにも黒いものが入ってきました。生まれたばかりのイルカのラボちゃんがピンチを迎えますが無事一命をとりとめます。

「ハートピア春江」と、「福井市文化会館」でも公演しました。出演した子供達は、充実感と笑顔いっぱいで満員の各会場で盛大な拍手を受けていました。

第4回 全国YOSAKO衣デザインコンペティションinふくい

福井県産の繊維で衣装製作

「よさこい」の演舞衣装の出来栄えを競う「第4回全国YOSAKO衣デザインコンペティションinふくい」（ふくいファッションイベント実行委員会主催、当財団協賛）の最終審査会が三月一日にサンドーム福井で開かれました。

全国に、繊維産地を発信するため、よさこい衣装のデザイン画を県産の繊維素材で製作し演舞を披露し競うものです。

今回は、全国から一二二チームの応募があり、各チームの英知を結集したデザイン画や写真で一次審査を通過した十三チームが、最終審査会に挑みました。各チームとも演舞テーマに合わせた鮮やかな衣装で音と光に合わせダイナミックに熱演を繰り広げました。大賞には、戦国時代の和服をイメージした衣装で力強く華麗な踊りの「月下桜舞連（香川県）」が選ばれました。また、優秀賞、げんでんふれあい財団賞は、「天晴連（福島県）」が受賞しました。

大賞受賞の「月下桜舞連」チーム

小浜市連合婦人会結成60周年記念のつどい

西川ヘレンさん“家族の絆を大切に”

小浜市連合婦人会主催（当財団共催）の平成二十年度「婦人のつどい」が二月八日（日）小浜市文化会館で和太鼓演奏や落語など多彩な内容で盛大に開催されました。

地域のみんなで手をつないで健康で楽しい生活を送ることを目的に活動している同連合会の心意気を示す恒例のアトラクションでは、十一地区の婦人会が衣装や仮装に工夫を凝らして踊り、歌、コーラス、寸劇など元気いっぱいのステージを繰り広げました。会場のお客さんから盛んに拍手が送られていました。

その後の記念公演会では、西川ヘレンさんが「大家族―支え愛、語り愛、励まし愛」と題して、四世代同居の日常生活の中で両親の介護の体験をもとに家族とのエピソードを交えて家族の絆やご近所とのふれあいの大切さなどユーモアたっぷりに語り、約八百人のお客さんは熱心に聴き入っていました。

“家族の絆 大切に” 西川ヘレンさん

げんでんふれあい福井 第33号
2009年3月発行

財団ふれあい通信

平成21年度 財団の助成を受けたい団体を募集　申請期限4月20日（月）

財団では、文化団体等の事業活動を支援するため「財団助成事業取扱規程」に基づいて助成をしています。平成21年度において文化活動等の事業を行うため、財団の助成を受けたい団体を募集しています。

対象団体の要件

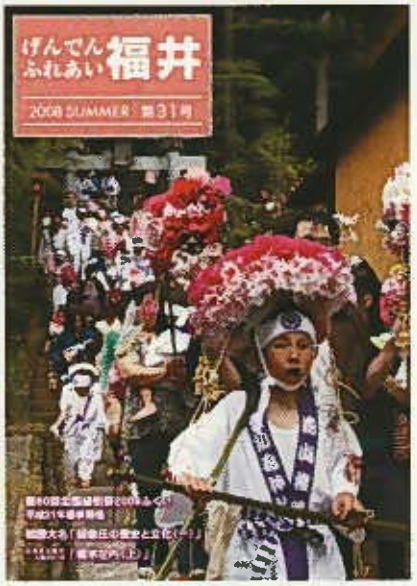
1、福井県内に活動の本拠を置く団体
2、構成員（会員）が原則として20名以上の団体
3、平成21年4月現在で、原則として設立後2年を経過している団体
4、営利を目的とせず、明確な会計経理を実施、報告できる団体
5、特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

応募の方法

●財団所定の「助成事業応募要領」により「推薦団体」の推薦を受け、助成事業申請書を平成21年4月20日（月）まで（申請事業の実施が4・5・6月の場合は3月20日まで）に当財団に提出してください。
●申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等がありますので、詳しいことは「げんでんふれあい福井財団」にお問合せ下さい。

読者アンケートご回答のまとめ　げんでんふれあい福井 第31号

本誌第31号（平成20年7月発行）のアンケートに総数48通のご回答をいただきありがとうございました。その結果を下表のとおりまとめました。今後も、皆様のご意見をうけたまわり本誌の充実に努めてまいりますので、ご協力をお願いいたします。



第31号で良かった記事

○第60回全国植樹祭2009ふくい 平成21年春季開催　22名
○戦国大名「朝倉氏の歴史と文化（一）」33名
○ふるさと福井・人物シリーズ「橋本左内（上）」　29名
○平成19年度風花随筆文学賞 財団賞受賞作品紹介　17名
○ふくいの伝統行事シリーズ「花山行事」　17名
○敦賀市立博物館 誌上ギャラリー／25　11名
○福井の文学碑「国文学者　芳賀矢一」14名
○第27回全国地名研究者大会開催 ～若狭を中心とした日本海の交流～　6名
○情報ファイル 平成20年度　財団助成事業決まる他　8名

本誌へのご意見・ご要望

○いつも表紙の写真のアングルがとてもいいので感心しています。
○朝倉氏の歴史と文化の記事、橋本左内の記事は大変勉強になりました。
○福井県ゆかりの偉人の活躍がわかりやすく載っていて勉強になります。
○福井の歴史や伝統行事などを学ぶことが出来て、大変良いと思います。
○県指定無形民俗文化財が詳しく載っていて、若い人にも読んでもらいたい。
○風花随筆文学賞作品はとても良い、子供にもぜひ読ませたいページです。
○福井の産業、特産品などを載せて、もっと福井をアピールして下さい。
○県内各所に、ここに行けば必ず置いてあるというような場所をつくってほしい。
○能を楽しむ会に参加した。貴重な芸能を見せてもらいとても感動しました。
○財団のイベントは、音楽から歴史に至るまで楽しそうな企画が多い。
○これからも福井県の文化の振興のために、知られていない、埋もれた文化の発掘や支援をして下さい。

財団イベント　INFORMATION

文化講演会	講師　林家染二（落語家）	4/18(日)	敦賀市プラザ萬象	敦賀市連合婦人会と財団共催
6月の宝石ドナウの真珠「ハンガリーの調べ」	豊永美恵とN響メンバー	6/6(土)	福井市ハーモニーホール	福井県文化振興事業団主催 財団共催
「決断」命のビザ ～杉原千畝物語～	水澤心吾　一人芝居	7/3(金)	敦賀市プラザ萬象	福井新聞主催 財団協賛 入場料2,000円
文化講演会	講師　川村妙慶（僧侶、アナウンサー、華道家）	7/4(土)	福井市福井県生活学習館	福井県連合婦人会と財団共催
げんでんふれあいコンサート2009	コロッケ	7/5(日)	福井市文化会館	財団主催 入場料2,000円（全席指定）

（発行）財団法人 げんでんふれあい福井財団　TEL.0770-21-0291 FAX.0770-21-9070
〒914-0051 福井県敦賀市本町2丁目9番地16号（日本原子力発電（株）敦賀地区本部4階）　HP http://www.genden.or.jp